

真田邸(新御殿)(国史跡)(長野市松代町松代)(真田宝物館)

江戸末期の御殿建築を知る貴重な邸

九代藩主・幸教が、義母・貞松院(幸良の夫人)の住まいとして1864(元治元)年に建築した松代城の城外御殿で、当時は「新御殿」と呼ばれていました。

江戸時代、大名の妻子は生涯江戸住まいを義務づけられていましたが、1862(文久2)年、十四代将軍・徳川家茂の時代に行われた文久の改革による参勤交代制度の緩和にともない、妻子の帰国が許可されたことから、松代にも屋敷が必要になりました。のちに、隠居後の幸教もここを住まいとし、明治以降は伯爵となった真田氏の私宅となりました。1966(昭和41)年、十二代当主・幸治氏により代々の家宝とともに当時の松代町に譲渡されました。

主屋、表門、土蔵7棟、庭園が江戸末期の御殿建築の様式をよく伝え、建築史の視点からも貴重な建物であり、松代城と一体のものとして国の史跡に指定されています。座観式の庭園の四季の風情も見どころです。

真田邸庭園内の土蔵のうち、3番土蔵は、ギャラリーとしてご利用いただけます。また、2番土蔵は、松代文化財ボランティアの会による「体験工房」として、切り紙や箏の演奏などが体験できます。

「真田宝物館」サイトによる



御殿 (主屋) 平面図

